

研究・調査報告書

報告書番号	担当
3 5 1	滋賀医科大学福祉保健医学講座
題名 (原題/訳)	
Drinking patterns of older Americans: National Health Interview Surveys, 1997-2001. 米国の高齢者の飲酒行動：国民健康調査 1997-2001	
執筆者	
Breslow RA, Smothers B.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
J Stud Alcohol. 2004 Mar;65(2):232-40.	
キーワード	
高齢者、飲酒、横断研究	
要 旨	
<p>目的： 本研究は、60 歳以上の飲酒習慣を有する米国人における、飲酒量と飲酒頻度を把握するために行われた。</p> <p>方法： 1997 年から 2001 年の 5 年間の横断研究（国民健康面接調査, National Health interview survey）が用いられた。飲酒量（平均機会飲酒量）と飲酒頻度（年間飲酒日数）より、一日平均飲酒量が算出された。60 歳～84 歳までの年齢による影響がロジスティック回帰分析により検討された。分析は、国民平均を予測するために重み付けをして行われた。</p> <p>結果： 60 歳以上の調査対象者 40556 人のうち男性の 52.8%（8136 人）、女性の 37.2%（8710）人が飲酒者であった。飲酒習慣のある男女では、年齢が高くなるほど、①多量（2 杯以上）飲酒者の頻度が低く（p trend <0.001）、少量（1 杯）飲酒者の頻度が高かった（p trend <0.001） ②最も飲酒頻度が少ない者（年間 12 日未満）と最も飲酒頻度が多い者（年間 260-365 日）の割合が多く（p trend <0.05）、中程度の飲酒頻度であるものの割合は一定あるいは減少していた。こうした飲酒量のみ、あるいは飲酒頻度のみによる年齢によるパターンは、量と頻度を併せて検討すると不明瞭になった。</p> <p>結論： 国民を代表する調査において、飲酒量と飲酒頻度は明らかに年齢層によって異なっていた。疫学研究においては、高齢者の飲酒量と飲酒頻度は病状によって異なることが示されている。高齢者の飲酒に関する研究に携わるものは、飲酒量と飲酒頻度を分けて検討することを考えるべきであろう。</p>	